

Title	<翻訳> ウィープ・ファン・ブンゲ「スピノザとオランダ」
Author(s)	ブンゲ, ウイープ ファン; 野々村, 梓
Citation	メタフュシカ. 2011, 42, p. 159-170
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23305
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

《翻訳》

ウィープ・ファン・ブンゲ 「スピノザとオランダ^{|1}

Wiep van Bunge: Spinoza and the Netherlands

野々村 梓訳

はじめに

哲学史家 Historians of philosophy はきわめて多様なゴールを目指す。ある哲学史家たちの関心はとりわけテクスト上の諸事実を確定することに向けられており、そのために、多くの時間を費やしてテクストの編集をする。他の哲学史家たちはまったく哲学的な理由から哲学史に関心をもっている。前者のタイプの歴史家によって産み出された成果と資料が、後者のタイプの研究者に提供され、それによって研究が進められる場合、どちらのタイプの歴史家も主として哲学的な真理を求めているといってよいと思われる。これに対して、哲学史家の第三のグループは、通常「思想史家 intellectual historians」と呼ばれる。彼らは自らの努力をより範囲の広い歴史探求 historical quest の一部として見なそうとする。何らかの哲学的真理を提示することが彼らの主たる関心なのではない。むしろ、あるテクスト、あるいは哲学的著作が時代を通じてもつ歴史的な機能、時代ごとにテクストが果たしてきた役割、そして、テクストがそれへと向けられてきたさまざまな自的に関する解釈仮説を提案することにある。

私はこの第三のアプローチを好ましいと思っている。哲学者によって組織された研究会でこんなことを言うのは何だが、私のことを真面目に理解してくれそうなのは哲学研究者よりむしろ歴史研究者であろうと認めざるをえない。とはいえ、とりわけテクストの歴史的な意味に関心をもつ哲学史家あるいは思想史家は、哲学者が従う同じ概念的な要請に縛られている。ここ数十年を通じて思想史家の間でもっとも影響力のあった学派は、政治思想史におけるケンブリッジ学派であった。この学派はその方法論のほとんどを、「意図」、「原因」、「意味」、「理解」、「コンテクスト」と

[・] 本稿は 2011 年 10 月 10 日、東京大学で開催された科研「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」主催(スピノザ協会、哲学会の共催)講演会において英語で発表された原稿の邦訳である。

いった概念へのおおむね支持された反省に負っている²。方法に関するジョン・ダンやクエンティン・スキナーの著名な論文は、オースティンの『言語と行為』とウィトゲンシュタインの『哲学探究』がなければ、けっして世に出なかったはずである。言語を行為の道具と見なす必要性をオースティンが強調し、ウィトゲンシュタインが意味は使用に依存すると考えたことによって、思想史はそれ固有の哲学的な基礎を与えられた。これはテクストが書かれ読まれるコンテクストを特に重視する彼らの分析のおかげである。コンテクストが重要であるのは、テクストの「意味 meaning」としての「使用 use」を我々が把握することができるのはまさにコンテクストを通してだからである。

1. オランダとスピノザ

スピノザとオランダという私の主題に目を移してみると、二つの別個の問いが現れてくる。すなわち、スピノザにとってオランダとは何を意味していたのか、そして、逆に、オランダにとってスピノザとは何を意味していたのか、という問いである。第一の問いについて言えば、オランダ共和国が何よりもまず、ポルトガルから移住してきたスピノザ家にとって安息の地であったことは明らかである。オランダ共和国のおかげでスピノザ家は商人として生計を立て、ユダヤ人としてのアイデンティティーを回復できた。我々は皆、アムステルダムがその市民に供していた自由を称賛する『神学政治論』の一節を知っている³。また唯一彼自身の名を冠して出版できたデカルト哲学入門のタイトルページは、著者を誇らしげに「アムステルダムの人」と表現しているのである。スピノザはあまり移動しなかったが、そのことはさらに彼のオランダに対するコミットメントに重要性を与える。デカルト、ホッブス、ロック、ベイル、そしてライブニッツとは異なり、スピノザはけっして生まれた国を離れることはなかった。我々の知る限りでは、1673年にコンデ公爵と面会すべく(これは失敗に終わった)ユトレヒトを訪問するという短い旅行のため、一度だけホラント州 the province of Holland を離れている。ただし、この外交的使命の詳細については依然として不明な点が多い⁴。

けれども、もし私が誤っていなければ、スピノザの共和国に対する関係において、決定的な要素は、勃興しつつあるこの国家の新しさであったのである。スピノザが成人する頃には、オランダ共和国はたしかに「ある国からは妬まれ、他の国からは恐れられ、すべての隣国から驚嘆の眼差しを向けられる」ような国家になっていたが。しかし、スピノザが誕生したときには、まだこの国家は、やがて1648年になって達成される国際的な承認を求めて係争中であったし、また[スペインに対する]反乱から誕生したその国家は、ある特定の理念が現実化したものでもなかった。

² もっとも関連する文献は次の論集のうちに見出される。James Tully (ed.), Meaning and Context. Quentin Skinner and his Critics (Cambridge, 1988). さらに、以下の文献も参照のこと。Richard Rorty, J.B. Schneewind and Quentin Skinner (eds.), Philosophy in History. Essays on the Historiography of Philosophy (Cambridge, 1984). より最近のものでは以下を参照。Tom Sorrell and G.A.J. Rogers (eds.), Analytic Philosophy and History of Philosophy (Cambridge, 2005). また、クエンティン・スキナーについて、現在入手できる知的伝記としては以下が興味深い Kari Palonen, Quentin Skinner. History, Politics, Rhetoric (Cambridge, 2003).

³ Baruch Spinoza, *Tractatus theologico-politicus*. Trans. Samuel Shirley (Leiden etc., 1989), p.298.

⁴ Steven Nadler, Spinoza. A Life (Cambridge, 1999), pp.316-319.

⁵ Sir William Temple, Observations upon the United Provinces of the Netherlands, ed. Sir George Clark (Oxford, 1972), p.1.

あらかじめ用意された計画などなかったのである。その国家はむしろスペイン軍との一連の衝突と、とりわけホラント州で勃発した熾烈な内乱からの予期せぬ結果だった 6 。20世紀の歴史家たちは、やがてオランダ共和国の黄金時代と呼ばれることになる経済的成功を手がかりに、この国の「近代性」に注目してきた。しかし、制度的な観点からするならば、それは本質的に中世後期におけるそれであって、地方のエリート層が「古い」特権を依然として保持しており、そしてその特権によって財力がそのまま政治的権力になっていた。スピノザは『神学政治論』の中で、ホラント伯を自称するスペイン王の不当な要求という興味深い事例を提示している 7 。周知のように、実際に最後のホラント伯であったフロリス5世は1296年に亡くなっていたのである。早くも1610年にグロティウスは、国の本来の統治権はオランダの旧家の後継者たちの間の問題だと主張していた 8 。

他方、同時代の見方からすればオランダ共和国には新しいところががたくさんあった。なぜなら、この古い政治機構は、たとえば、驚くほど多様な信仰を許容していたからである。支配的なのはプロテスタントであったが、そこに大きなカトリック共同体、小さいながらもユダヤ教会も含まれていた。もっとも、アムステルダムのセファルディム系ポルトガル人共同体が出来たのは17世紀初頭になってからである。それは8世代もの間奪われてきた生活様式を立て直す試みに直面した亡命者たちで構成されていた。彼ら、いわゆるユダヤ系の「新キリスト教徒」たちは違法とされた文化的・知的遺産を継承しながら、キリスト教への強制的改宗——これは14世紀後半からまずスペインにおいて、その次にポルトガルにおいて進行した——に従っていたのである。

1600 年代前半にアムステルダムに移住した「改宗者 conversos」の家族にとって、こうした遺産が実際に彼らに対して何を要求しているのかを判断することはしばしば困難であった。ポルトガル人共同体は、その最初の数十年間に彼らよりも歴史のあるユダヤ人共同体とその指導者―もっとも有名なヴェネチアのラビであるレオン・デ・モデナもそこに含まれていた――から助言を求めなければならなかった。サウル・レヴィ・モルテイラは、モデナの弟子の一人でラビの権威を確立しようと努めた人物であるが、彼がメナセ・ベン・イスラエルとともに、ユダヤ世界で名声を得るのは 1650 年代になってからである。また、ポルトガル人共同体は、彼らがアムステ

⁶ もっとも最近のもので言えば、以下の研究を参照。Henk van Nierop, *Treason in the Northern Quarter. War, Terror and the Rule of Law in the Dutch Revolt* (Princeton N. J., 2009). またもっとも包括的な研究は以下である。Jonathan I. Israel, *The Dutch Republic. Its Greatness and Fall, 1477-1808* (Oxford, 1995). さらにオランダの文化史については、以下を参照。Karel Davids and Jan Lucassen (eds.), *A Miracle Mirrored. The Dutch Republic in European Perspective* (Cambridge, 1996); Willem Frijhoff and Marijke Spies, *1650: Hard-Won Unity* (Assen-Basingstoke, 2004); Maarten Prak, *The dutch Republic in the Seventeenth Century* (Cambridge, 2005).

⁷ Spinoza, *Tractatus theologico-politicus*, p.279.

⁸ Hugo Grotius, The Antiquity of the Batavian Republic, ed. Jan Waszink a.o. (Dordrecht, 2000), Ch. 5-7.

ってことに関する研究は膨大であるが、そうした研究の多くは以下の拙論の中で挙げておいたので参照していただきたい。 'Baruch of Benedictus? Spinoza en de "marranen"', *Mededelingen vanwege Het Spinozahuis* 81 (2001) and 'Spinoza's Jewish Identity and the Use of Context', *Sudia Spinozana* 13 (1997) [=2003], pp.100-117. また、スピノザのユダヤ的背景の関連性に関する結論に対して、スティーブン・ナドラーから批判が寄せられている。 Steven Nadler, "The Jewish Spinoza', *Journal of the History of Ideas* 70 (2009), pp.491-510.

ルダムで得ている例外的立場をはっきりと感じ取ってもいた。彼らの指導者たちが、迎え入れてくれたキリスト教徒たちの機嫌を故意に損ねるような態度をとらなかったことがそれを如実に示している。こうしてなぜパルナッシム(ユダヤ人共同体の理事)が、「手に負えない」振る舞いで目を引き、共同体全員に悪影響を及ぼしうるような成員の破門に熱心であったのかが説明される。よく知られるように、17世紀の間におよそ200人がアムステルダムのパルナッシムによって何らかの理由で追放されている。そうしてみると、1656年に青年スピノザがどういう理由で追放されたのか精確なところは分からないにせよ、共同体内部の不安定さに加えて、フローイエンブルフ[アムステルダム市内の地区]近辺で生活しているユダヤ人共同体に対する外部からの圧力が、なぜスピノザが若い時分にそれほどまでに厳しい罰を受けたのかを説明する助けになるだろう。というのは、1650年代中頃以前にスピノザが自分の正真正銘の「哲学」に似た何かを生み出していたとうかがわせる証拠は何もないからである。

もちろん、私はアムステルダムのポルトガル人共同体がもっと安定したものであり、もっと彼ら自身が自信をもっていたなら、おそらくスピノザの追放は阻止されたであろうと言うつもりはない(ちょうど、メナセがロンドンへ旅行していなければ、スピノザはこのかつての先生によって「救われた」であろう、と論じられてきたように)。『神学政治論』の著者がメナセの集会の従順な成員であったということは私には想像し難いからである。すると、スピノザがあの若さで、またあのような仕方で破門されていなければ、『神学政治論』はどんなふうになっていたかということがやはり問題になりうる。

17世紀のオランダ共和国における生活の第二の新しい側面——スピノザの「自己形成」にとってきわめて重要であったと思われる——に移ろう。それはスペインに対する反乱それ自体のまさに直接的な結果たる大学制度 academic culture に関するものである。神学者、法律家、物理学者の専門家層を教育する必要に迫られて、1575年から 1648年にかけて、レイデン、フラネケル、グローニンゲン、ユトレヒト、ハルダーヴァイクといった都市は大学を創設し、その幾つかは程なくして優れた大学となった。しかし、これらの大学が新たに設置されたということは、何よりもまず哲学者たちとってきわめて大きな強みとなったのである¹⁰。というのは、1640年代にはユトレヒト大学とレイデン大学では旧哲学 philosophia vetus が勢力を失いはじめ、新哲学 philosophia nova がそれに取って代わろうとしていたからである。この新哲学とは多くの場合、単純にデカルト——彼は成人してからの人生の大半をオランダ共和国で過ごした——の哲学のことだった¹¹。ヨーロッパの由緒ある旧教の大学では依然としてアリストテレス哲学が支配的であった中で、オランダの大学では、アリストテレス主義を放逐することはその伝統がそれほど根づいていなかったので比較的容易だった。アドリアン・バイエは、17世紀後半に出版されたデカルトの伝記の中で、そのことを——しばしば引用されるフレーズで——こう表現している。すなわち、

Paul Dibon, L'Enseignement philosophique dans les universités néerlandaises à l'époque précartésienne, 1575-1650 (Leiden 1954)

¹¹ Theo Verbeek, Descartes and the Dutch. Early Reactions to Cartesian Philosophy, 1637-1650 (Edwardsville, 1992).

ユトレヒト大学は実のところ「デカルト主義の大学として誕生した」¹²、つまり、その端緒からユトレヒト大学はデカルト主義の根城であったということである。

スピノザが成長して、哲学に関心を抱くようになる頃には、レイデン大学とユトレヒト大学 では優秀で有望な多くの若い教師を任用し、彼らのすべてが新哲学を広めることへと邁進して いた。そしてスピノザが著書を出版する頃にはデカルト主義は哲学における「標準的な」学派 になっていた。だが、このことは17世紀後半にアリストテレス主義が大学のカリキュラムから まったく消え去ったということではない――少数の人気のある教師たちは数十年にわたってア リストテレス哲学を支持し続けた。のみならず、オランダの「デカルト主義者」たちはデカル トその人が忌避するような見解をもっていたのである――デカルトの一時的な盟友であったへ ンリクス・レッヒウスの例は周知の通りである¹³。とはいえ、1660年代と1670年代を通じて、 ユトレヒトと同じようにレイデンでも、そしてグローニンゲン、フラネケルでも、アリストテ レス哲学の概念用語の中でも主要な概念がたしかに廃れてきており、また批判者の多くは共通 の主義主張をもった学者、科学者の、こう言ってよければ「派閥」、「党派」、集団に帰属してい るというはっきりとした意識をもっていた14。まだアムステルダムに住んでいた頃のスピノザは、 機会あるごとに、こうしたデカルト革命について見知ったはずである。アムステルダムのスピ ノザの友人たち、たとえばロデウェイク・マイエル、クールバハ兄弟はレイデンとユトレヒト における主要なデカルト主義信奉者と一緒に学んでいた。スピノザはレインスブルフに住んで いたためにレイデンには毎日通うことが出来た。彼の名前は学生名簿には記載されていないが、 大方の専門家が一致して認めるように、たとえばデ・ラーイと、もしかしたらゲーリンクスと も一緒に標準課程を履修したかもしれない¹⁵。1663年にわずか数週間のうちにデカルト哲学へ の入門書を書き上げたという事実だけでも、彼が若いときにどれほどデカルト哲学をマスター していたかは明らかである。

17世紀のオランダ共和国における生活の第三の側面――ひょっとするとこれはスピノザの哲学にとってとりわけ意味のあることかもしれない――はおそらくその比較的平等な社会の成り立ちである。私はこのことについてただ示唆するに止めるけれども、たとえばジョナサン・イスラエルは、旧秩序の間ドイツ、イングランド、そしてフランスにおいて依然として社会生活を形作っていた本質的に封建的な社会的階層秩序がオランダ共和国には明らかに欠けていたということをきわめて重視している。勃興しつつあった共和国は驚くほどの社会的流動性を許容していた。

¹² Adrien Baillet, La Vie de M. Des Cartes, 2 vol. (Paris, 1691), II, p.2.

¹³ Theo Verbeek (ed.), Descartes et Regius. Autour de l'Explication de l'Esprit humain (Amsterdam-Atlanta, 1993).

Wiep van Bunge, From Stevin to Spinoza. An Essay on Philosophy in the Seventeenth-Century Dutch Republic (Leiden-Boston, 2001), Ch.2.

¹⁵ Nadler, Spinoza, Ch.8.

¹⁶ Jonathan I. Israel, Radical Enlightment. Philosophy and the Making of Modernity, 1650-1750 (Oxford, 2001), Ch.3 and 4. また、「市民 burger」という概念については以下を参照。Remieg Aerts and Henk te Velde (eds.), De stijl van de burger:
Over Nederlandse burgerlijke cultuur vanaf de Mddeleeuwen (Kampen, 1998); Joost Kloek and Karin Tilmans (eds.),
Burger. Een geschiedenis van het begrip 'burger' in de Nederlanden van de Middeleeuwen tot de 21ste eeuw (Amsterdam, 2002).

レヘントの一部の門閥は高貴な家柄を誇ることができたが、大部分のレヘントはそれができなかったのである。第一に、オランダは大規模な土地所有を認めるには単純に狭すぎた。第二に、対スペイン反乱を生き延びた貴族階級――昔からの土着の名家は多く絶えてしまった――も、その後ホラント州やゼーラント州で活動していた商人たちに取って代わられてしまった。商人たちの礼節のセンスは、ヨーロッパ貴族の格式によってではなく、「市民」のそれによって定義されたのである。外国からの訪問者たちは、アムステルダム市長がヨーロッパのどこの貴族にも比肩しうるほど裕福で権力を持ちながら毎朝市庁舎まで歩いて通うのを見て仰天した。(現在も自転車で勤務に向かう大臣は珍しくない)。

しかし、スピノザの「水平的な horizontal」と呼ばれうるような形而上学は措くとして、こうした社会的階層秩序の相対的な欠如を彼のスピノザの晩年の政治哲学に結びつけることは、たしかに危ういことであると私も認めざるをえない。また、アムステルダムのエリート層が住んでいるカイゼルスフラフトでの生活と、貧しい人々が暮らしているスラム街の実際の差異が過小評価されるべきではないとも思う。もっと言えば、レヘントと呼ばれる商人階級は17世紀後半には、かなりのところ貴族的と言ってよい社会階級そのものに急速に変わっていったのである。とはいえ、いずれにせよオランダ人が暮らしていたのは共和国であったし、そしてスピノザはたしかにある種の「共和主義者」であったのである「ったしかに、スピノザの生活と著作に対するオランダ共和国の、とりわけその「若さyouth」の持つ意味についてもっと語ることもできよう。しかし、スピノザの最初の読者の大多数は、当然のように彼の見解を嫌悪したという事実も忘れてはならない。多くの同時代人に対してスピノザの提示したものは、たしかに実質で、奇妙で、そして危険でさえあるものであった。少なくとも、黄金時代の著名な専門家がずっと主張しているように、スピノザは同国人に対して「ほとんど語るべき言葉をもたなかった」のである「8。

2. スピノザとオランダ

今度はオランダにとってスピノザとは何を意味していたのかということについて考えてみよう。17世紀オランダにおいてスピノザの果たした役割は何か、オランダにおけるスピノザ主義はどういう目的をもっていたのか、そしてそれが引き起こした反応とは何か。スピノザの初期受容――まずはそれはドイツにおいてであったが――に関する1980年代以降の多くの研究から、スピノザの哲学はその著作に対する一般的な反感にもかかわらず、長い間研究者たちが思っていた以上に大きな影響を同時代人たち与えていたことが明らかとなっている。

もちろん、最初にスピノザを賞賛した人々が「スピノザ主義者」になったのはさまざまな理由からであっただろう。それは、ただ彼らが多種多様な人々であったということからして明らかである。そうした人々とは、たとえば、イエレス、バリング、ド・フリースといったアムステルダムにいたメンノー派の敬虔な信者、マイエル、クールバハ兄弟、といったアムステルダムの自由

¹⁷ もっとも最近のものでは、以下を参照。Raia Prokhovnik, Spinoza and Republicanism (Basingstoke, 2004).

¹⁸ A. Th. Van Deursen, De last van veel geluk. De geschiedenis van Nederland, 1555-1702 (Amsterdam, 2004), p.307.

思想家、クッフラー、ファン・バーレンのようなハーグの著名な法律家と聖職者、好色文学を手がけていたアドリアーン・ベフェルラントのような公然のリベルタン、である。さらに、レーンホーフやファン・ハッテムといったカルヴァン主義者もいたし、最後に『フィロパテルの生涯を追って』(1697)、『スピノザの思想』(1719) ――これは『三人の詐欺師論』という名でも知られている――といった悪名高い書物の匿名の著者もいた。これらの著者はともに、マーガレット・ジェイコブに倣って、ジョナサン・イスラエルが「急進的啓蒙主義」と呼んだものの最初期の代表者である。イスラエルによれば、これは本質的に、神学的な権威の破壊を目論む世俗的な運動であった。イスラエルの『急進的啓蒙主義』 Radical Enlightenment の出版される以前に、私はこうした初期のラディカルな啓蒙においては二つの別々な要素あるいは傾向を区別すべきであると論じたことがある。私にとっては今でも、一方のイエレスとバリング、そして他方の『フィロパテルの生涯を追って』の著者や『スピノザの思想』の著者という二つの傾向の類似点よりも、むしろ相違の方に関心がある¹⁹。

とはいえ、たしかに、オランダのあらゆる初期スピノザ主義者を結びつけていた一つの要素があった。それは、政治的闘争に行き着く神学と信仰に関する論争に終止符を打とうとする願望であったように思われる。神学上の論争が政治の領域を巻き込み、しばしば暴力に行き着いてしまう様を、彼らは皆心底から嫌悪していたのである。つまり、オランダ共和国において、幾人かの同時代人たちは、国家の安寧を転覆しかねない永続的な神学論争からの脱却を可能にするものとしてスピノザの哲学を受け取ったのである。スピノザの哲学は、ユークリッド幾何学と同じ程度に確実かつ不可疑の言葉で究極の問題に答えるであろう――こうした約束はある人々には大きな魅力であったはずである。最終的に、世界、神、人間、人間の幸福に関する見解がここにある、それが、聖書が絶えず産み出している解釈上の不確かさを一掃してくれる、そうスピノザの友人たちは考えたらしく思われる。共和国の安寧に対する絶えざる脅威と広く見なされていた派閥主義に終止符を打つことができるような哲学がついに出てきた、というわけである²⁰。

歴史を忘れないでおこう。この若いオランダ共和国は強力な中央権力を欠いていたし、また国教会ももたなかった。それは「不和」によってずっと損なわれていた。1619年のドルトレヒト会議以降、1650年のウィレム2世によるアムステルダム攻撃、1672年のフランスによる侵攻に起因する混乱、ヨハン・デ・ウィット兄弟の暗殺に至るまで、国内不和という不安材料が消えることはけっしてなかったのである。1580年代には既にユストゥス・リプシウスによって、内乱のもたらす悲惨な結末が説得的に論じられていた。つまり、諸州からなる共和国は緩い連邦という性格上、政治的安定がほとんど保証されなかったのである。そいうわけで、まさに文字通りの意味で、17世紀のオランダ共和国の全歴史は「和合」の追求であった。実際、オランダ議会は「小さいものも一致することによって大なるものとなる Concordia res parvae crescunt」 — オランダ語では、「統一は力をつくる Eendracht maakt macht」 — をかの時代から今に至るまで標語としている。

¹⁹ Wiep van Bunge, 'Spinozistische vrijdenkers in de republiek', *Rekenschap* 45 (1998), pp.103-116.

²⁰ Wiep van Bunge, From Stevin to Spinoza, Ch.5.

他方、不可疑の真理を提供する唯一の学課としての数学に対する信望はオランダではきわめて強いものであった。少なくとも、シモン・ステフィン以来、民間の技術者と軍事技術者、建築家、航海士、ホラント州とゼーラント州の有力な商会を管理する会計担当者たちは、かなりの程度の(応用)数学のトレーニングを受けた²¹。最初にデカルトがオランダに移り住んだときでも、彼がそうしたのはフラネケルでメティウスと数学を共同研究するためであったし、またデカルト自身の自然哲学が、競合する学派に代わるもっとも有力なものとして急速に認知されていった一つの理由は、まさに彼の自然哲学が期待させる数学的な厳密さにあったのである。デカルト哲学に基礎を持ち、しかもデカルトがまだ認めていた自然哲学と神学・政治の領域の間にある障壁の前でとどまろうとしない哲学、そうした哲学をスピノザが開始するや否や、幾人かのオランダ人たちは、あまたの神学・政治的な闘争の根源が無効化されるのではないかと感じたはずである。

スピノザの最初の批判者たちもまた皆それぞれの思惑があった。アルミニウス派で、レモンスラント派聖職者のヤコブス・バトリエは、当然のことながら、とりわけスピノザの決定論の危惧すべき帰結を指摘することに専心していた。他方、スピノザの批判者の多くはデカルト主義者であったのだが、その理由は簡単である。ファン・マンスフェルト、ファン・ブレイエンベルフ、ウィティヒウス、そしてベイルは、いかにデカルトの哲学がスピノザによって歪曲されてきたかを論証することで、熱心にデカルト主義からスピノザ主義を切り離そうと努めただけではない。最後は自分たちも護教論者たりうるのだという気概を証明するのにやぶさかではなかったはずである²²。デカルトが彼の『省察』を無神論への対抗手段としてソルボンヌ大学に提出して以来、彼の支持者たちにとって神の存在証明や魂の不死性に関するデカルトの議論を繰り出すこれほどの好機はなかった。なぜなら、彼らが対決しているのは、本質的に超自然的で予見を備えた創造者、そして非物質的な「魂」といったキリスト教の伝統のうちで培われ、デカルトの形而上学が確証したような考えとはまったく似ていない神や人間精神の考えを持った哲学者だったからである。

とはいえ、オランダでのスピノザ主義に対する熱狂に関して言うかぎり、18世紀にそれが急速にほとんど消え去ってしまったということは強調しておく必要がある。哲学史家たちはニュートン主義の勃興を指摘してきた。スピノザの批判者たちは早くからこれを利用した。たしかに、ライデンやユトレヒトにおいてすら1720年代にはデカルト主義は廃れ、また葬り去られてしまっていたのである3。デカルト主義はたちどころに成功し、その分短命でもあった。しかし、文化史家であれば、誰もこんな、ただ18世紀の事態を記述しただけの答えにはおそらく満足しないだろう。どうしてそれで、オランダにおけるスピノザ主義が影響を長く残せなかったという明

²¹ *Ibid.*, Ch.1.

²² Ibid., Ch. 4.

²³ たとえば、以下を参照。Gerhard Wiesenfeldt, *Leerer Raum in Minervas Haus. Experimentelle Naturlehre an der Universität Leiden, 1675-1715* (Amsterdam, 2002). また、オランダにおける初期のニュートン主義については以下を参照。 Rienk Vermij, 'The Formation of the Newtonian Philosophy. The Case of the Amsterdam Mathematical Amateurs', *The British journal for the History of Science* 36 (2003), pp.183-200. および、E. G. E. van der Wall, 'Newtonianism and Religion in the Netherlands', *Studies in the History and Philosophy of Science* 35 (2004), pp.493-514.

らかな不首尾を理解できるだろうか。文化史家にとっては、18世紀のオランダの人々がスピノザにさしたる関心を持っていた形跡がないという事実は、17世紀の最後の十年間の間にスピノザ主義が寄与した目的について怪しむべき理由となる。オランダ啓蒙主義の専門家の多くがしばしば一致して認めるように、18世紀の最初の数十年間に急進的なスピノザ的啓蒙の必要性は消え失せ、正統派プロテスタントを急進的な造反者から区別する弁証法は、合理的な範囲内でさまざまな信仰が容認されるべきであるという広く共有された見解に取って代わられていたのである。付け加えれば、共和国の内的統一に対する関心は別な懸念の影にかすんでしまっていた。そのことはオランダの急進的共和主義の注目すべき歴史を見れば一目瞭然である。ジョナサン・イスラエルもまた指摘しているように、1672年以後、とりわけ名誉革命の後になると、オランダの急進的共和主義はオラニエ主義 [君主制賛成派] へと大きく転換した24。1672年以後、共和主義者たちは、とりわけルイ14世の外交政策のゆえにウィレム3世のような君主の強い対抗力がとにかく必要となっているという認識で一致していたように思われる。

ウィレム 3 世の没後、第二の無総督時代には、多くの教養あるオランダ人の最大の懸案は共和国の急速な衰退であった²⁵。その経済、軍事、文化的な終局に関する研究は膨大であり、たとえば正確にいったいいつ衰退したのか、そしてそれは実際にどのくらいひどいものであったのか、決定的なその時期確定を含めて見解は分かれる。その間、十分な原因究明と適切な処置を見出そうとオランダの知識人層が必死であったことは間違いない。おそらく、その時分にはスピノザの哲学はもはや解決のヒントとは見なされなくなっていたのであろう。さらに、18 世紀なってもなお続いていた宗教的寛容の議論においてもまたスピノザはいかなる役割も果たさなかった。ある専門家、ヨリス・ファン・エイナテンが言うところに倣えば、もしスピノザがかつて実在しなかったとしても、18 世紀オランダ共和国で巻き起こったような寛容に関する議論には何ら変化はなかったであろう²⁶。

実のところ、スピノザの哲学が再びオランダ文化に対する意義を回復するのは、ようやく 19世紀後半になってからなのである。そのころにはスピノザの自然主義、および啓示宗教批判を利用する自由思想家たちの強力な運動が出現していた。たとえば、1860年代に、その運動のもっとも激烈な提唱者ヨハネス・ファン・フローテンは躊躇することなく、ダーウィンの『種の起源』

²⁴ Jonathan I. Israel, Monarchy, Orangism and Republicanism in the Later Dutch Golden Age (Amsterdam, 2004) and Enlightenment Contested. Philosophy, Modernity, and the Emancipation of Man, 1670-1752 (oxford, 2006), Ch. 10.

²⁵ 初期近代のオランダにおける経済史については、以下を参照。 Jan de Vries and Ad van der Woude, The First Modern Economy. Success, Failure and Perseverance of the Ditch Economy, 1500-1815 (Cambridge, 1997). また、以下の研究も参照のこと。 Margaret C. Jacob and Wijnand W. Mijnhardt (eds.), The Dutch Republic in the Eighteenth Century. Decline, Enlightenment, and Revolution (Itaca-London, 1992); Joost Kloek and Wijnand Mijnhardt, 1800: Blueprints for a National Community (Assen-Basingstoke, 2004) and Wijnand Mijnhardt, 'The Construction of Silence. Religious and Political Radicalism in the Dutch Republic', Wiep van Bunge (ed.), The Early Enlightenment in the Dutch Republic (Leiden-Boston, 2003), pp.231-262.

²⁶ Joris van Eijnatten, 'What If Spinoza Never Happened?', *De Achttiende Eeuw* 41 (2009), pp.144-149. さらに彼の次の著書も参照。 *Liberty and Concord in the United Provinces. Religious Toleration and the Public in the Eighteen-Century Netherlands* (Leiden-Boston, 2003). 18 世紀オランダの政治思想におけるスピノザの不在に関しては、以下を参照。Wyger Velema, *Republicans. Essays on Eighteen-Century Dutch Political Thought* (Leiden-Boston, 2007).

はスピノザ哲学の論理的帰結であるとまで主張したのである²⁷。とはいえ、攻撃的で論争的な態 度によって、フローテンは孤立をつのらせることになった。とりわけ彼のカントに対する多くの 攻撃は、どちらかと言えば、主としてオランダにおけるドイツ観念論の地位をかえって強化する 結果になったようである。それ以前にはカントと彼の追随者がオランダの大学でほとんど積極的 に取り上げられなかったことを考えれば、これはそれ自体注目に値する成功だったわけである²⁸。 スピノザの哲学はオランダの大学の教育課程には何ら影響を与えることはできなかったのだ が、その一方で、19世紀末にはファン・フローテンの支持者たちによって協会が首尾よく創設さ れた。そこではスピノザに関するきわめて多様な活動が催され、現在に至るまで、そうした活動 の舞台となっている。現在、「スピノザの家協会」Vereniging Het Spinozahuis は、オランダのうち でもっとも大きな哲学協会となっている。それは、およそ1200人の会員数を数えるが、その大 多数はもちろん専門の哲学の研究者ではない。実を言うと、21世紀初頭においても、スピノザを 専門的に研究しているオランダの大学教員は数える程しかいないのである。今日、残念ながら私 は、スピノザを問題関心の中心に据えているような同僚をたった一人、すなわちピート・ステー ンバッカーしか知らない。急いで書き加えておけば、彼は哲学史家である――私や、あなた方に とっておそらく馴染みのあるところで言えば、ちょうどへンリ・クロップやハン・ファン・リュ ーラーがそうであるように。(さらに付け加えておけば、ベルギーではこれよりもっと事情は悪い。 ここ数十年、ヘルマン・ド・デインがただ一人のスピノザ研究の権威であった。しかも、彼は

いわゆる最近のスピノザの「人気」が実際にはどういうものであるか説明するために、私は一般の読者と専門的な研究者とでスピノザに対する評価が対称性を明らかに欠いているということを強調しておきたい。スピノザ哲学の手ごろな入門書と彼の著作の翻訳のオランダでの売り上げが好調であること、またスピノザに関するセミナーや講演がかなりの聴衆を集めていることは本当である。しかし、オランダの哲学教員たちはそれをまったく気に留めていないのである。現在、オランダの哲学の専門家の大多数は――今日、どれだけの哲学教員がオランダにいるのかをお聞きになれば、おそらく驚かれるだろう――多かれ少なかれ、イギリス、スカンジナヴィア、オーストラリア、アメリカで職業哲学者がしているのと同じことをしている。つまり、彼らはイギリスやアメリカの雑誌に、論理学、心の哲学、道徳哲学のテクニカルな細々とした事がらに関する論文を投稿しているということである。彼らはほとんど哲学史そのものには関心を持たないし、しかもスピノザがその人にとって特別の意味をもっているような、そういうオランダの哲学者が評価されている例を私は一つとして知らない。私の知る限りでは、ヨーロッパ大陸において、現代哲学に

2008年に引退しているのである。)29

²⁷ Siebe Thissen, De Spinozisten. *Wijsgerige beweging in Nederland, 1850-1907* (The Hague, 2000). また、以下の拙論も参照。'Johannes van Vloten et le "premier" spinozisme néerlandais au XIXe siècle', André Tosel, Pierre-François Moreau, and Jean Salem (eds.), *Spinoza au XIXe siècle* (Paris, 2007), pp.427-440.

²⁸ もっとも最近の研究では、以下を参照。Viktoria E. Franke, Een gedeelde wereld? Duitse theologie en filosofie in het verlichte debat in Nederlandse recensietijdschriften, 1774-1837 (Amsterdam-Utrecht, 2009), Ch. 3.

²⁹ Cf. Wiep van Bunge, "Geleerd" spinozisme in Nederland en Vlaanderen, 1945-2000', *Tijdschrift voor Filosofie* 71 (2009), pp. 13-38 and 'Spinoza en de Nederlandse canon', Theo van der Werf (ed.), *Herdenking van de 375ste geboortedag van Benedictus de Spinoza, Mededelingen vanwege Het Spinozahuis* 93 (2007), pp. 11-24.

影響を与えることによって、スピノザが本当の「力」をもって現前し続けているただ一つの国はフランスである。しかし、フランス哲学のオランダにおける衝撃もいまではほとんど見るべきものはない。以上のことから、我々は奇妙な帰結へと導かれる。すなわち、スピノザが今日オランダにおいておそらくもっとも人気のある哲学者である一方で、他方、オランダの専門哲学者の大部分がスピノザを無視している、というこのことである30。

結論

今日、スピノザがオランダにとって何らかの意味をもっているとすれば、それは二つの理由がるように私には思われる。一方で、おそらく多くのオランダ人がスピノザを読むようになったのは、1960年代から 1980年代にかけてオランダで起こった大規模な世俗化の動きの結果であるということである。たった一世代で、オランダはヨーロッパで何らかの宗教を信仰している人口の比率がもっとも高い国から、何らかの宗派に属している信者数の割合がもっとも低い国に様変わりしたのである³¹。そのために、多くのオランダ人は教会がこれまで与えるはずだった答えに満足しないようになり、それに代わる「人生観」を探し求めるようになった。ある人々とっては、おそらくスピノザ主義がそうしたすき間を埋めることになったのだろう。(つい先日、「スピノザの家協会」会員の一人が私にそのように言ったのである。「私は協会の講演と夏期講習がとても楽しいのです」と言ってから、彼は少し考えて続けた。「おかげで神を信じることなしに、神について語ることができるのですからね」)。

つい最近スピノザは、新聞や高級週刊誌で啓蒙主義の現代的な意義を巡って巻き起こった注目すべき論争のただ中にあった。9.11、そしてピム・フォルタインとテオ・ファン・ゴッホの暗殺以降、ジョナサン・イスラエルの『急進的啓蒙』がジャーナリストや評論家たちの間で引き合いに出され議論された。しかし彼らがスピノザの哲学、あるいは18世紀の思想史について自分なりの洞察を持っているということはほとんど聞いたことがない³²。また、「多文化主義」に関する賛否双方からの唐突な論争の直接的結果として、とりわけアヤーン・ヒルシ・アリが『急進的啓蒙』とスピノザを賞賛していると明かしてからというもの、スピノザの生涯と著作が突然それだけで時事問題であるかのような相を呈した³³。これら二つの動きがこれからどういう展開を見せるのかは不確かであると言わざるをえない。近年多くのことが「宗教の回帰」について言われてきたのであるが、それが将来的に西ヨーロッパ、あるいはどこか別のところでどういう結果に帰着するのかは知る由もない。まったく同様のことが、『急進的啓蒙』に関する世間を沸かせた

³⁰ 最近の調査については、以下を参照。Lorenzo Vinciguerra, "The Renewal of Spinozism in France (1950-2000)', *Historia Philosophica* 7 (2009), pp. 133-150.

³¹ この点については、特に以下を参照。Peter van Rooden, Religieuze regimes. Over godsdienst en maatschappij in Nederland 1570-1990 (Amsterdam, 1996) and 'Long-Term Religious Developments in the Netherlands, 1750-2000', Hugh McLeod and W. Ustorf (eds.), The Decline of Christendom in the Western World, 1750-2000 (Cambridge, 2002), pp. 113-129.

³² こうしたことの幾つかの背景については以下を参照。Ian Buruma, Murder in Amsterdam. The Death of Theo van Gogh and the Limits of Tolerance (New York, 2006).

³³ Cf. Wiep van Bunge, De Nederlandse Republiek, Spinoza en de radicale Verlichting (Brussels, 2010). また、近刊予定の以下の拙論を参照。 'Radical Enlightenment. A Dutch Perspective'.

論争についても言える。それはいまややや下火になってきてはいるが、それが含む数々の争点はそうではない。したがって、今後数十年の間にスピノザがオランダにとって何を意味しうるのかということについて、私はしっかりした見通しをもっているわけではない。私の見るかぎり、オランダのスピノザ主義の未来は未決のまま開かれている³⁴。

(ののむらあずさ 哲学哲学史・博士後期課程)

³⁴ Cf. Wiep van Bunge, 'Spinoza Past and Present', G.A.J. Rogers, Tom Sorrell and Jill Kraye (eds.), *Insiders and Outsiders in Seventeenth-Century Philosophy* (New York-London, 2009), pp. 223-237.